

優秀賞

## 素敵な大人

大谷大学 文学部 1年 水口 真緒

満員電車で揺られていた。

ふと、私のすぐ隣で赤ちゃんの声があった。ぷつりぷつりと途切れるか弱い声だが、しだいに長く、高くなり、叫ぶような泣き声へと変化していく。見ると、若い女性の抱っこ紐の中で、一歳にも満たないような赤ちゃんがぐずり出していた。母親らしきその女性は表情を曇らせ、体をゆすり、小さな頭を何度も撫でた。しかし赤ちゃんはまるで容赦などない。精一杯に不機嫌を叫んでいる。帰宅ラッシュの時間帯。そこは疲労感の満員電車だ。一切の乗客の意識がそこに集中しているのを私は感じた。母親こそ、そうだろう。不安げな表情で、赤ちゃんの口元を緩く覆っている。

「大丈夫ですよ。」と声があった。声の主はスーツを着た若い男性だった。若い母親は、「すみません、ありがとうございます。」と頭を下げ、辺りを見まわし、少し表情を緩ませてすみませんと頭を下げた。男性のその一言で、少しの会話で、車内の一点に向かって張り詰めていた緊張感がぱつと解かれたのを感じた。

当然、私も気にしないではないと当たり前に思っていた。乗客の多くがそうであっただろう。しかし、私を含む多くの人が「大丈夫ですよ」を伝えようとはしなかった。言葉は、声に出して伝えることが、一番わかりやすい。それが見知らぬ相手でも、安心させる言葉をかけてあげられる、素敵な大人をその日見た。その男性の笑顔は、優しくゆつたりとしていて、どきつとした。帰宅ラッシュの満員電車。けれどその瞬間、車内に満ちていたのは疲労感ではなく、元気な泣き顔を見守ろうという正しい一体感だった。

私はあの男性のように、かけてあげるべき言葉を、きちんと届けられる大人になりたい。人をあたたかい気持ちにできる人間になりたいと、強く思った帰り道だった。